様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ２０２７８

研究課題名（和文）物語論によるセルフスタディを用いた教員研修の原理的・開発的研究

研究課題名（英文）A Conceptual and Developmental Study of In-Service Teacher Education Using Self-Study with Narrative Theory

研究代表者
岡村　美由規（Okamura, Miyuki）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授

研究者番号：５０４６７７８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：日々の教職生活の中で自らの意図や行動を振り返るだけでなく、その意図や結果をあえて経験として意図して言語化し、他者に開示し他者の反応を受けながら自らの物語として記述する行為（物語としてのセルフスタディ）は、実践に関するメタ知識すなわち自己の実践を見通す知識を生成することがわかった。
また生成されたメタ知識だけでなく、メタ知識を生成した経験が、教職実践における言動に根拠をもたらし、その結果実践に自信をもたらすことも明らかになった。 他者への助言の際にも、内容的限界に基づいて行えるようになることも指摘された。自分の体験を他者に開示し語ること（語り）は自分自身を癒し、これが職能成長を促すことも示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今日の日本での現職教員研修は行政研修を核としつつ、校内研修で行政研修で提供される内容の普及と定着を図るものと、日本の学校教育で伝統的に継承されてきた授業研究の2種類に大別されるなか、本研究は学校教員の日常的な職務生活のなかでの違和感にあえて向き合い物語ることも、職能開発のための方途になることを示した。物語という主観や感情を他者に開示する行為は、教職に携わる職業人としての自己成長あるいは成熟を自覚し、その自覚が職業実践へ正の効果をもたらすことを本研究は示した。これは職能開発という用語や現職教員研修が、教員に課せられる業務内容に直接的に関連する事項に制限されるという前提を見直す根拠となる。

研究成果の概要（英文）：The act of not only reflecting on one's own intensions and actions in his/her daily teaching-profession lives at schools, but also daring to verbalize the intentions and results of those actions with intentions as experiences, disclosing them to others, and describing them as one's own story after receiving their reactions (i.e., self-study as a story) is found to generate meta-knowledge about the self and one's actions, or knowledge of forseeing one's own practice. This study also found that not only the meta-knowledge generated, but also the experience of having generated the meta-knowledge, can bring grounds one's each actions and speeches which results into confidence to one's own practice. This brings an attitude of technical guidance or advices based on the limitations of them that one gives to others. The experience of disclosing and telling others (storytelling) was found to heal oneself.

研究分野：教育学

キーワード：セルフスタディ　物語論（ナラティブ）　省察、反省、リフレクション　アクションリサーチ　現職教員にとっての研究　情動、感情　校内研修

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

学校教員の資質・能力といった職能開発が重要であるのは論を待たないが、それにしても、彼らに対する社会からの期待は年々重くなっている。こと免許更新講習の発展的解消に伴い、求められる教師像も「学び続ける教師」に加えて「研究する教師（teacher as researcher）」像が議論されるようになっている。さらに校長の職務として「対話」が挙げられるなど、ライフワークバランス政策とともに研修の内容・方法といったあり方そのものの抜本的見直しの必要性は非常に高い。

今日の日本における制度化された現職教員研修は、一方では行政研修を核としつつ、校内研修や教育センター等で行政研修で提供される内容の普及と定着を図るものと、もう一方では日本の学校教育で伝統的に継承されてきた授業研究を柱とした校内研修の 2 種類に大別される。そのなかで、本研究は学校教員の日常的な職務生活のなかでの違和感にあえて向き合い他者に物語ることも、職能開発のための有力な方途であるという仮説をたてている。

現代は、制度的再帰性、すなわち自己は外的な影響に決定される受動的な存在にとどまらず、個人は自らのアイデンティティの形成を通じて、社会の一部を構成する特性をもつ時代である（ギデンス, A.著　秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳. 2021.『モダニティと自己アイデンティティ　後期近代における自己と社会』ちくま学芸文庫）。これを教育に援用すれば、教育とは、教師の自己に基づいた教育的言動が児童生徒や学生に投射され、彼らの反応を通して教師の教育的言動が教師自身に戻ることで自己の教育的実践の意義を自覚するといった、再帰的な（reflexive）営みである（cf. 丸山恭司. 2015.「教育哲学の実践－その状況性と再帰性」小笠原道雄編.『教育哲学の課題「教育の知とは何か」』福村出版.366-381.）。教師が自身の言動を省察せねばならないのはここに理由がある。

２．研究の目的

そこで本研究は、職場としての学校が多忙であるという現実のなかでも継続的に実践でき、実質的な職能開発につながることを前提とした、教員が教育の再帰性に気付く研修方法について、その方法のみならず、教育の再帰性を気付くことの重要性を根拠づける原理を見出すことを目的とした。具体的には、教員が行う自己を対象とした研究「セルフスタディ」に、自身の経験を物語ること「物語論」を取り入れることで、勤務校において教員が心理的安全な集団形成することを促しつつ、同時に職能開発を行える方法論を原理的に研究し、実践的に開発することとした。

３．研究の方法

教師による自己言及的研究方法での職能開発については、欧米で 1990 年代に誕生した、ある「セルフスタディ（Self Study）」がある。セルフスタディは 2010 年代より日本でも注目されている（Samaras, A.P. 2011. Self-Study Teacher Research: Improving Your Practice Through Collaborative Inquiry. SAGE publications, Inc.）いるが、現在はまだ受容段階にとどまっており（齋藤眞宏・大坂遊・渡邉巧・草原和博. 2021.「教師教育者の専門性開発としての self-study（セルフスタディ）－その理論的背景と日本における需要と再構成－」『学校教育実践学研究』28: 105-120）、日本においてセルフスタディの効果を明らかにした研究や実質化する方法論的検討は、まだない。こうして日本における効果は未知数ながら、本研究はセルフスタディの当事者性、自己言及性に注目し、職能開発の有効な方法論としての可能性を見出しており、そのため本研究の方法論として採用することにした。従来の教師教育の研究で主流であった、児童生徒や学校教員を対象とした第三者による研究方法ではなく、学校教員／大学教員自身が、自己の実践を研究対象にした自己言及的、再帰的研究方法という点に注目したのである。

セルフスタディ自体が日本ではその原理的探究、実践的検証ともに手薄ななかで、本研究はまず、セルフスタディの理論面の解明を行った。「自己」に注目する本研究では、とくに自己を見つめ開示する行為としての「物語ること（Narration/Auto-ethnography）」の原理が解明される必要がある。この原理解明には、文献研究を行った。

次に「物語ること」の効果をみるために、以前に共同研究を行った現職教員の協力を得て、面談を行い、自己を対象に研究した経験が日々の教職実践にもたらしていることについての語りを分析した。

４．研究成果

（１）物語としてのセルフスタディは実践のメタ的知識を生成することを明らかにしたこと

学校教員が自身が体験した事柄を他者に対して物語るということ（story-telling, narration, auto-ethnography）を、行為の側面から記述すれば、学校での日々の教職生活の中で、自らの意図や行動を振り返るだけでなく、その意図や結果をあえて経験として意図して言語化するということになる。こうした物語ることは、雑談のようにたわいないことも物語る行為であるので、誰しもが日常生活で行っていることだろう。日常生活で行っている物語ることを、意識して（信頼おける）他者に対して行うことで自己を開示し、自分の物語を聞いてくれた他者の反応を受け

とりながら、あらためて自らの物語として記述する行為を、本研究では「物語としてのセルフスタディ」と呼ぶことにする。そして物語としてのセルフスタディは、自己や自らの行動に関するメタ的知識、言い換えれば、自己の実践を見通す知識を生成することが明らかになった。

ここで生成されたメタ的知識は、あくまで自分の実践について説明力を発揮する知識である。これまで非自覚的に行ってきた言動について説明することで、あらためて自分がもっていた信念や価値観の輪郭を示す知識でもある。これはドナルド・ショーンが示した、実践を基礎づける4つの定項（constants）（これをショーンは実践内知（knowing-in-practice）と称した）に相当する。ショーンが示した4つの定項とは：①その職業で特に使われているメディア・言語・実践のレパートリー、②現象を評価する際の価値判断の体系、例えば状況や行為の評価や問題設定の基盤となる価値観など（appreciative system）、③現象を意味づける基盤となる価値観のセットおよびそれらが相互に関連する体系のあり方（overarching theory）、④自身が設定した問題を所属組織がもつ文脈に位置付ける際に基盤となる役割観（role frame）である。本研究で面談した高校教員の語りはかつて行った共同研究を事後的に省察したものであるが、あらためて共同研究で再言語化し記述された語りは定項②、③、④によって構成されていたことを示すものであった。ここから、物語としてのセルフスタディは、実践の基盤となる個人的知識を形式化するという操作が加わるゆえに、当事者本人も気づかなかった、すでに持っている信念や価値観とその使用法について説明するメタ的知識を生成するものだといえる。

さらに、生成されたメタ的知識だけでなく、メタ的知識を生成した経験が、その後の教職実践において、自らが取る言動に根拠をもたらし、その結果、実践に自信をもたらすことも、本研究で面談した高校教員の語りから明らかになった。このことは結果として、他者に指導・助言をする際にも、自分が行っている指導や助言の内容の限界を自覚させ、その自覚に基づいた指導や助言ができるようになったことも示された。

（２）メタ的知識の生成が自己の職業的アイデンティティを再構築することが示されたこと

上述したメタ的知識の効能として、自己の職業的アイデンティティを再構築することが示された。またあらためて、セルフスタディへの動機づけとして、職業上役割の単なる模索に留まらない、役割を果たす最中に抱く実存的な違和感、職業的自己（職業的アイデンティティ）の実存的問題を自覚されたときに動機づけが強くなることが示された。

前者の点は先行研究としてClandininらが指摘していたことではある（Clandinin D. J., & Connelly, F. M. 2004. Knowledge, narrative and self-study. In J. J. Loughran, M. L. Hamilton, V. K. LaBoskey, & T. Russell (Eds.), International handbook of self-study of teaching and teacher education practices. 575-600. Kluwer)。しかし自己に関するメタ知識を生成するプロセスが時間の経過のなかで徐々に深まっていくこと、また記述する行為において、物語った内容が新たな物語として再構成される瞬間の積み重ねのなかで、事象を分析する自身の枠組みの組み換わり、結果として新たな自己が形成されるというプロセスを自らの経験的研究（empirical study）として明らかにすることができた。それに加えて、本研究者がその時間的経過と注いだ労力を体感できたことは大きな成果であった。これは個人に留まる成果として見なされ得るが、だからこそ物語としてのセルフスタディの効果とともに、この研究方法を行うにあたって各個人が解消しなければならない実践的課題として指摘することができるようになった。

（３）物語ることは自己に癒しをもたらし、他者への寛容をもたらすことが明らかになったこと

（２）で示したように、自分の体験を他者に開示し、語ることは、自分自身を癒すことにつながる。癒しは、自分の物語に対して反応してくれる他者の受容的態度からももたらされ、また、自らの語りを言語化し論文として記述し終えたとき、体験が意味ある経験として新たに当人の中に位置付けられる。自己を他者に物語ることが当人を癒すことについてはナラティブセラピーでも指摘されてきたが、教職実践において、同僚教員に語ることも、それまで体験のなかに埋め込まれていた負の感情を浄化し、癒しがもたらされることが示されたことは成果であった。

さらに、言語化し記述していくなかで、自らの言動が他者にどのように映っていたか、持っている意図がそのまま理解されず、期待と反する受容がされることを自覚的に引き受けて認識することで、限界や弱みも含みこんだありのままの自分を知るとともに、受け入れることにつながる。ゆえに他者に対しては、限界と弱さを自覚しきれていない可能性を踏まえ、非自覚的であるからこそ自らもつ限界と弱さに無防備にさらけ出されている他者に対しては、(それまで以上に)寛容に接することができるようになることも示された。これがギデンズのいう、自己のアイデンティティの再構築という様態なのだと理解される。そして他者に寛容に接することで、自然と同僚との共同性が高まり、おのずと実践のコミュニティと呼ばれるような、民主的で共同的な同僚との関係性がつくられていくのだろう。このことが、個人的な職能成長を促していると考えられる。

（４）<reflection>を実質化する基底には倫理的判断基準があること

上の(1)～(3)からもたらされた知見は、省察/反省として人口に膾炙している<reflection>の再検討へと導いた。周知のように、日本で使われている省察や反省の語は、ドナルド・ショーン

が使用した reflection の用法に依拠しており、かつ、ショーンがいう reflection-on-action（行為後にそれを振り返る、事後の省察/反省）を意味して使われている。しかしショーンの意図は、専門職に従事している professional（専門職者）とは、その職が専門職としてみなされる要件の一つである、その職業実践を根拠づける高度で体系的な知識のみならず、すでにそれら知識を実践において意識的・無意識的に用いることを通じて身体化しており（embodied）、それを元に新たな現象に対処できる知（knowing）をもって実践していることを指摘することだったといえる。この身体化された知が働く現象を、ショーンは実践および実践を構成する行為ごとに反省を行っている（reflection-in-action）と描写した。既発表論文で指摘したことだが、reflect の原義に照らし合わせれば、光が水面や鏡を反射して自らの姿を映し出すことで自己を見て知ること（reflect）は、常に水面や鏡に映し出された自分と既に持っていた自己についての知識や映像との間を交互に行きつ戻りつつ照らし合わせ続けること、その過程で、新たに見出した自分について思考し判断すること、この２つの無意識的かつ前言語的認知的行為を行っていることになる。そして、本研究で明確になったのは、後者の前言語的認知的行為すなわち、新たに見出した自分について思考し判断するには、すでに身体化されている、判断基準を根拠にしているということであった。この各人がもっている職業上の行為の妥当性を判断する基準は、もたらす結果への責任をとるうえで、倫理的にならざるを得ない。ゆえに、ショーンが提唱する〈reflection〉には、身体化した倫理的判断基準が埋め込まれているといえる。

本研究からこの点を明確に指摘できたことは本研究の副次的効果だといえる。

（５）残された課題

最後に、本研究で残された課題を述べる。それは、物語ることを主たる活動にした現職研修の開発ができなかったことである。この要因として、本研究者が学校の具体的現場で研修企画を提案できるほどの信頼関係に基づくネットワークをもっていないことがある。学校の年間計画は行事や教務で満載であり、そこに研究という形でのセルフスタディ的な研修を提案し採用してもらうことは難しかった。物語としてのセルフスタディは、自己を語るだけでなく、その語りを他者に聞いてもらい、あらためて言語化して綴っていくというプロセスのなかで、それまで見方や解釈を規定してた枠組みの再編が起こることが重要な効果である。だが他者へ物語ることの先にある、綴るという行為の段階で自己の質的変容が起きるとはいえ、その段階は時間を要せざるを得ず、実現するには現状の学校環境では難しい。したがって、綴るという行為の工夫、もしくは綴るという行為を代替するものを探すことで、学校での実践へのハードルを下げる必要がある。こうした取り組みやすい物語としてのセルフスタディの方法開発とその試行的実践が残された課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 鈴木篤、平井悠介、河野桃子、岡村美由規	４．巻 第127号
２．論文標題 教育哲学研究における「科学性」の再検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育哲学研究	６．最初と最後の頁 119-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡村美由規	４．巻 -
２．論文標題 若手支援企画『教師として「実践的」研究へどう向き合うか』に参加して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本教育方法学会『教師として「実践的」研究へどう向き合うか―教職大学院における学びを問う、データ駆動型社会に向き合う授業研究（１）―授業研究をどう捉えるか―（第25回研究集会報告書）』	６．最初と最後の頁 38-38.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miyuki Okamura	４．巻 -
２．論文標題 "What did the "Narrative/Autoethnographic Self-Study" experience bring to in-service school teachers in Japan? - a case study of collaborative research of high school teachers and a university researcher"	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Association for Teacher Education in Europe and Etovos Lorand University. ATEE Annual Conference 2023 'Teacher Education on the Move' Book of Abstracts. Brussel: ATEE.	６．最初と最後の頁 94-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤眞宏、大坂遊、渡邉巧、草原和博、大村龍太郎、岡村美由規、大西慎也、山内敏男、小林浩明、上田和子、武田信子	４．巻 69
２．論文標題 セルフスタディを語り合う―教師教育者の「教えることを教える」ことの探究とその成果―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中国四国教育学会『教育学研究紀要』	６．最初と最後の頁 574-585
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 岡村美由規
２．発表標題 教育哲学の「科学性なるもの」の探究―教師教育学への援用を射程にいれて―
３．学会等名 教育哲学会第65回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡村美由規
２．発表標題 私のセルフスタディの来し方を振り返り行く末を語る
３．学会等名 広島大学教育ヴィジョン研究センター（EVRI）定例オンラインセミナー講演会 No.138「金曜に夜更かし―セルフスタディを語り合う―（１）教育方法学・教育哲学におけるセルフスタディ」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Miyuki Okamura
２．発表標題 What did the "Narrative/Autoethnographic Self-Study" experience bring to in-service school teachers in Japan? - a case study of collaborative research of high school teachers and a university researcher
３．学会等名 Asociation for Teacher Education in Europe (ATEE) Annual Conference 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 岡村美由規
２．発表標題 現職教員による自主的研修としての「セルフスタディー物語ること」は何をもたらしたか
３．学会等名 日本教師教育学会第33回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 岡村美由紀
２．発表標題 教育哲学の立場からのセルフスタディー自己（self）を対象に研究する（study）ということと大学での実践―
３．学会等名 中国四国教育学会第75回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 齋藤眞宏・大坂遊・渡邉巧・草原和博（編著）岡村美由規、祝迫直子、前元功太郎、山本佳代子、河原光亮ほか31名	４．発行年 2024年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 306
３．書名 セルフスタディを実践する　教師教育者による研究と専門性開発のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関